

シリーズ ひと



つねみ よしあき
常見 義旭さん

大字白岡在住。白岡町商工会の特産品開発のプロジェクトチーム、特産品推進委員会委員長。ほかに白岡町商工会副会長、白岡町商店会連合会会長など要職を多数兼務している。

「特産品と併せて

販売店の充実が課題です」

常見さんは寝具店を経営する傍ら、現在平成10年度から白岡町の特産品開発に取り組んでいる特産品推進委員会の委員長として活躍している。今回誕生した「なし飴」「三日月のブルーベリー」「ブルーベリーヨーグルトアイスクリーム」の3つの新商品（P18参照）の開発にも携わった。

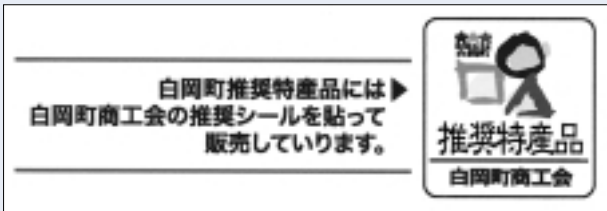
新商品の開発は、7名ほどの小委員会を検討することから始まる。最初にアイデアを出し合い、町内の専門店で試作を依頼する。その後は試食と作り直しを繰り返し完成度を高めていく。

「委員それぞれの好みがあり、なかなか意見がまとまらないんですよ。」と苦笑した。そんな常見さんに特産品開発のきっかけを尋ねると、「もともと白岡町の特産品を作りたいたいという話はいろいろなところで出ていたんです。そんなとき県からの補助金が付くということになって話が一気に進みました。だからこの市町村でもできることなんですよ。あとはやる気があるかないかだけですね。白岡は梨という特産品があるもののそれだけでは特産品を作るには限界があります。そこでブルーベリーの栽培を農家に依頼するなど工夫してここまで特産品を増やしてきたんですよ。」と力強く話してくれた。

順調に見える特産品だが、最初に開発した「梨のリキュール」から苦勞の連続だったという。「白岡の梨を近くの業者に依頼してリキュールにしたかったのですが、リキュールを造る免許がなかった

り技術的に難しかったりして造れる酒造会社が県内では見つからなかったんです。行き詰まった末、埼玉県商工会連合会に問い合わせ、熊本の酒造会社を紹介してもらったんです。今でも白岡の梨を熊本に送って造ってもらっているんですが毎回同じ味に仕上げるのはたいへん難しいみたいですよ。」と懐かしそうに話してくれた。

最後に、今後の活動について尋ねると、「特産品の数ばかり増やしても買ってもらえなければ意味がありません。今後は昔からの商店街である白岡駅西口周辺を整備して、販売店の充実を考えていかなければいけないですね。」と、将来を見据えて語ってくれた。



「ぼくたち、いとこです!!」

むろい じゅうせい
室井 優成 くん(5か月)(左)
かが りょうすけ
加賀 涼介 くん(1歳)(右)



「いつもいっしょ
ず〜っと仲良し」

おりはら ゆう
折原 悠 くん(4歳)(左)
ここみ ちやん(1歳)(右)



「はーちゃんスマイル♡ピカッ」

かみや はじめ
紙屋 肇 くん(4か月)

お子さんの写真を募集しています 氏名(保護者とお子さん)・

生年月日・住所・電話番号・写真にコメントを添えて、直接または、封書で郵送してください。年齢については、3月1日現在で掲載しています。

投稿先 〒349-0292 白岡町大字千駄野432 白岡町町民活動推進課広聴広報担当
☎(92)1111 内線352